

三 松 禅 寺  
平 成 27 年 1 月  
第 63 号

檀家の皆様  
ご寄稿を  
お願いします

# 慈門無礙

(仏の友情は  
こだわりのない)

三松寺住職 皆川大真



平成二十七年・乙未(きのとひつじ) 仏紀二千五百八十一年 本年も御道交の程、宜しくお願い申し上げます。

大晦日の寒中 徹宵坐禅(午後十時〜午前三時) 引き続き本堂にて大般若祈祷「檀信徒各家の諸縁吉祥」を祈祷致しました。

昨年、議員公金不正支出事件や『ダメよだめだめ』のフレーズが流行りました。「懺悔・サンゲ」とは、他人からのダメだしではなく、自分の感謝の心で快方に向ける行です。

例えますと、健康診断の結果(コンピュータ画面で確認し数値を正しく表示の場合) 診察室に入る前の緊張や期待・不安・疑心暗鬼、更に想定外の結果ならば機械の故障・医者診たてにも間違った(疑い)を持つ

「まだ自分の体の状態を認めていないから。どの病院で検査しても、結果が同じだ」とようやく(認める)

「娑婆」とはインドでは「スハー」と言いますが、翻訳は「忍土」忍のよこに言を付け事実を認める「認土」と訳します。(疑心) からの自分の状態を診察し、正しく示していただいて(感謝) し結果を(認め、忍ぶ) 快方(光明) に向けて毎日コツコツ歩む行で、

自信や信用の『信』が生まれます。不正をバレないよう隠し、正しい指摘に対して、よく教えていただいたと感謝もせず、逆に(怒り・逃走する) 『もう自分はダメだ駄目駄目』と責めるのは傲慢の一つ、「卑下慢」であり、暗い『疑』が生まれます。

懺悔(サンゲ)には感謝

と認めと忍辱が内蔵する、光明に向かう『清らかな願い・敬愛・慈悲・認め・許し』の暖かい道です。

本屋さんに行くと、自己啓発本が沢山並んでいます。「今の自分をもっと良くする」背表紙が謳っています。もっともっとと良くしよう、の欲を駆り立てられると自然に落ち着きがなくなりま

す。良悪に振り回されないと仏道・生命の尊さに感謝すると(落ち着き)が溢れます。限りある露命、あなたの今の足元・慈悲の門に入り、深呼吸・合掌・感謝・坐禅を今年も精進いたしまし

しょう。  
**三つの清らかな願い**  
(三聚浄戒)  
仏の教えを聞いて、信が厚く、退くことがなければ、喜びは自然にわき起こる。この境地に入れば、

何事にも光りを認め、喜びを見出してゆくことができる。心は清く柔らかに、常に耐え忍び、争いを好まず、人を悩まさず、

仏法僧を思うから、喜びは自然に湧き出で、光をどこでも見いだせる。信ずることによって仏(慈悲)と一体になり、我(自己中心)という思い

を離れているから、我が者を貪らず、したがって、生活に恐れがなく、そしてられることを厭わない。

仏の国に生まれる事を信じているから死を恐れな

い。教えの真実と尊さを信じているから、人々の前に出ても自分の信じているところを言うことができる。

また慈悲を心のもととするから、すべての人に対して好き嫌いの思いがなく、心が正しく清らかであるから、進んで善を修める。また、どんな出来事に会っても、仏の心を心として人々を導き、濁った世の中にも、汚れた人々の間にも交わって、その人々が善にうつるよう尽くすのである。

釈尊

# 舍利礼文

一心頂礼 万徳円満 釈迦如来  
真身舍利 本地法身 法界塔婆  
我等礼敬 为我現身 入我我入  
仏加持故 我証菩提 以仏神力  
利益衆生 發菩提心 修菩薩行  
同入円寂 平等大智 今將頂礼

## 訓読

一心に、万徳円満なる釈迦如来の真身舍利と、本地の法身と、法界の塔婆に頂礼したてまつる。我等が礼敬したてまつれば、我が為に身を現し、入我我入す。仏の加持が故に、我は菩提を証し、仏の神力を以て、衆生を利益す。菩提心を發し、菩薩行を修し、同じく円寂に入る。平等なる大智に、今將に頂礼したてまつる。

## 訳

あらゆる徳を完全に具足なされた釈迦如来の舍利(遺骨)、そして本地の法身(真理そのもの)と、法の智体(真理のあらわれ)を象徴している塔婆に、一心に額ずき最上の礼をもって礼拝を捧げます。このように私たちが礼拝恭敬しましたら、私のために(仏が)姿を現して、私と一体になら、私をして仏に入らしめてくださるのです。仏の加持力によって、私は無上の正覚(正しい覚り)を証得させていただき、仏の神通力によって、衆生を利益するのです。(仏の神通力のお蔭で)私は菩提心をおこし、菩薩行を修め、仏とともに同じく円寂に入らせていただくのです。平等なる大智である仏に、今まさに私は最上の礼拝を捧げるのです。



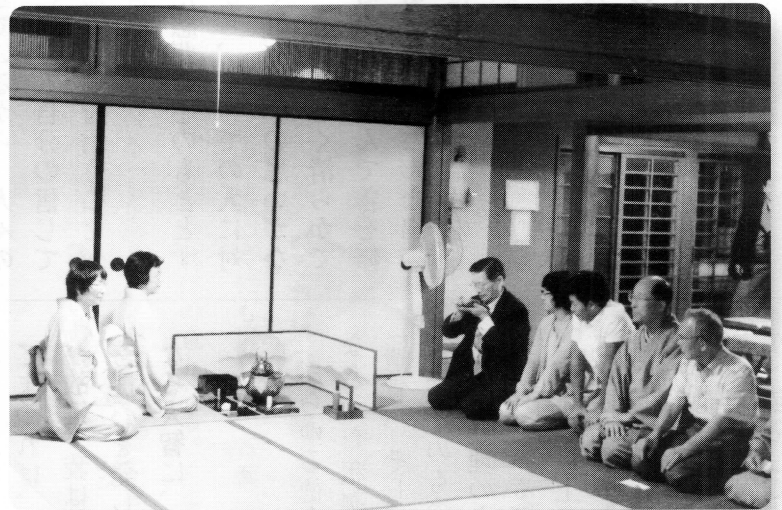
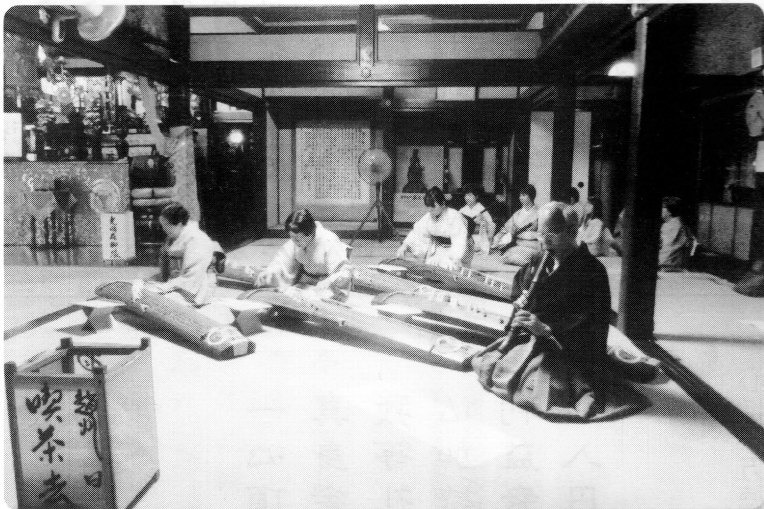
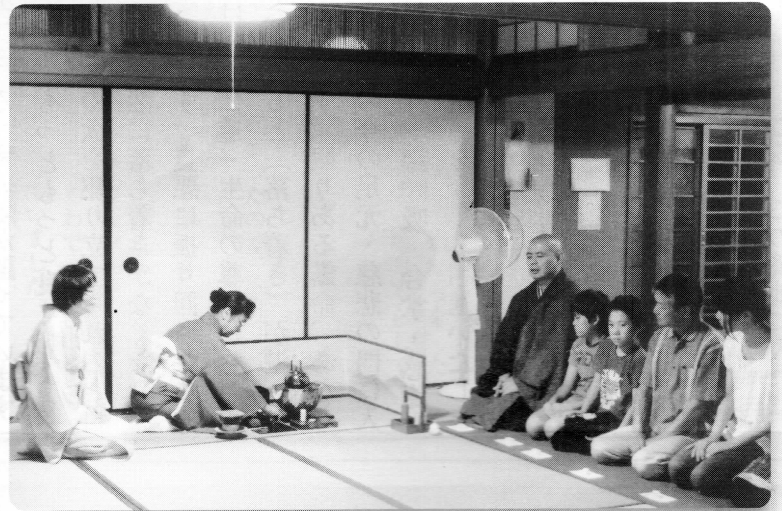
今年は九月二十七日(日)です  
志納



毎年  
十五夜恒例  
「送月の宴」  
九月八日(月)のようす  
茶会

夕六時坐禅

七時琴尺八







坐禅の基本



(調身)



(調息)



(調心)



# 「ジャータカのえほん」

## —おしやかさまが生まれるまえのおはなし—



おしやかさまは、

シヤカ族の王子さ  
まとして、お生ま  
れになるまえに、

なんどもなんども、

生まれかわって、

そのたびにたいへ  
んりっぱな、おこ  
ないをされました。

そのけっか、シ  
ヤカ族の王子さま  
に、お生まれにな  
ったのだといわれ  
ています。

では、おしやか  
さまは、どんなよ  
いおこないをされ  
たのでしょうか。

「のうふの  
しゅつけ」

文・豊原 大成

絵・小西 恒光

自照社出版

「ジャータカのえ  
ほん①」より再掲

### のうふのしゅつけ

むかしむかし、おしやかさまは、まずしい のうかに お生まれ  
なりました。大きくなつて、のうふになり まいにち、のはらを た  
がやして、うりや かほちやなどの やさいを つくつて、くらし  
ていました。

のうふは、ある日、こころの しゅぎようが したくなつたので  
おほうさんに なりました。

しかし、しゅぎようが たいへん むずかしかつたので、おほうさ  
んを やめて、もとの のうかに かえりました。

そのうちに また しゅぎようが  
したくなり、もういちど おほうさん  
になりましたが、つらいので、また  
のうかに かえり、くわで たんぼを  
たがやして くらしていました。

このようなことを 六かいも くり  
かえしましたが、七どめのとき、「こ  
んなに しゅぎようが つづかないの



は、くわが あるからだ」とかんがえ、  
くわを すてることに きめました。  
大きな川の きしべに たつて、目  
をつむり、くわを ぐるぐると ふり  
まわして、川に なげすて、

「かつた、かつた」  
と、大ごえで さげびました。

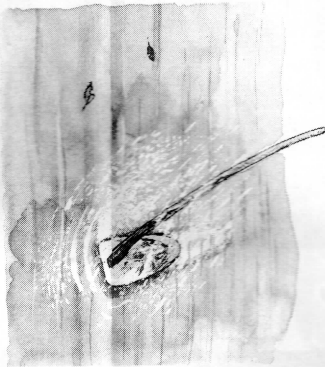
ちようど そのとき、せんそうに  
かつて かえる とちゅうの 王さま  
が とおりかかりました。

「おまえは なにに かつたのか」  
と、王さまは たずねました。

「わたしは、わたしの よわいこころ、わるいこころ、なまげごころに、  
かつたのです」

と のうふは こたえました。

王さまも けらいたちも、  
「これこそ ほんとうの かちと いうもの」  
と、のうふに したがって、おほうさんになりました。



(一七〇)

### 道元禅師和歌

声こえづから 耳みみに聞きゆる 時ときされば

吾わが友ともならん かたらひぞなき、

「声づから」づからは接尾語で、声から、声によって、声が（声自身の意）。

「耳に聞ゆる」聞ゆるは、自ずとその声が入ることをいう。

「時されば」(延)時なれば(傘・略)時しれば。さればは、去るの語で、古くは遠ざ

かるにも、近づくにも用いた。万葉「冬ごもり春さり来れば」とあり、春が近

づけば、春が来ればの意となる。古事記中にも「夕されば、風吹かむとぞ木の葉

さやげる」とあり、夕べになればの意。ここでは時がくれば の意。

「かたらひぞなき」語らいの語。話しあう。話しあうことがない の意。

(歌意) その声が、自然に耳に入ってくる。そのような時がくれば、何の語り合うことがな

くとも、皆わが友だちといふことができる。

この歌は、自然の声を耳にし、自然を友とし、自然に語りかけた歌といえる。聞声

の歌として素晴しく、かたらひぞなき と結んでいるのは、そのまま、わが友として

語りあっているともしえよう。

### 俳句

まほろばの三松禅寺今日の月  
慈しむ琴の調べや月の宴  
遙かなる恩師恋ふるや月見餅  
御佛に合掌しはし良夜かな  
ふるさと雲州平田萩の花

平成二十六年九月吉日

高橋慈雲

